

## 江戸期の滑稽俳諧（一）

伊藤浩睦

短詩文芸の歴史を追ってみると、恋愛至上主義ともいべき平安時代には和歌は恋のために作られ、読み手を笑わせてやろうとする気分はありませんでした。鎌倉期になると連歌が流行しますが、人の集まりの中で風雅を追うものとなり、やはり笑いを取りに行く気分はありませんでした。

室町時代になると能の興行のなかで狂言が行われたように、連歌会のあとで滑稽な句を詠み捨てて、みんなで大笑いするようになります。江戸初期には俳諧連歌が文芸として成立します。

俳諧連歌を成立させたのは松永貞徳という人で、父は連歌師の松永永種で母は藤原惺窩の姉であるとされ、祖父は松永久秀であったとも伝わっています。

連歌師として有名になる一方で、碩学の評判が高く、豊臣秀吉の祐筆に採用されます。二十六歳で朝廷から「花咲翁」の称を賜り、当代随一の連歌師が名乗る「花の下」の号を継承します。

関ヶ原の戦いで豊臣家が天下人でなくなると貞徳は浪人となり、京都で連歌師の看板を上げますが、弟子として集まってくる富裕な町人たちは、貞徳の文化人としての教養よりも人を笑わせるのを得意とする洒脱な人柄に期待していました。

そこで貞徳は、室町時代に成立していた『犬筑波集』や『守武千句』などを踏まえて、俳諧連歌を創始します。貞徳の俳諧連歌は、庶民の言葉で行なう連歌でした。式目と呼ばれる連歌の規定はそのままでしたが、和歌と同様に「やまと言葉」を用いるのが原則であった連歌に対して、漢語や俗語を用いても良く、連歌の言葉とは異なる言葉を「俳言」と呼んで俳言を用いるのが俳諧連歌であるとなりました。

一句の読み捨ての『犬筑波集』の時代には、下ネタで強引に笑わせようとしま

---

したが、貞徳の俳諧は連歌と同じ百韻の付け合いなので、前の句に対する付け筋で笑いを取るような方向に進みます。

連歌が前の句の景色に次の句を付けていたのに対して、貞徳の俳諧は言葉に付けて行きます、白が出たから米、米が出たから鮭、鮭が出たから桶、桶が出たから水汲み、水汲みが出たから転ぶ、転ぶが出たから滑る、滑るが出たから天皇の譲位といった具合に連想ゲームのようにやるのです。当時は天皇が位を降りることを「滑る」と言っていたので譲位が出るのですが、庶民の生活から天皇に飛躍するところで笑いが生まれます。

室町時代の俳諧に比べると微温的な笑いですが、これが俳諧連歌の担い手である富裕な町人の気分によく合ったので、教養を積みながら笑うことも出来る文芸として歓迎され、貞徳の俳諧連歌は大流行して、本家である連歌を圧倒してしまします。

ところが、鎌倉以来の連歌を追い詰めるほどの流行にもかかわらず、本人は笑いを追っていることを卑下する気分から抜け切れませんでした。本業は連歌師であるという自負を持ち、俳諧は庶民を高尚な文芸である連歌や和歌に導くための過程であるとしていたのです。そして、このように笑いを求めることを卑下する気分は、日本では後々まで、二十一世紀である現代まで続いていると言えます。